



育兒叢談 (八)

—〇、三四歳頃まで—

一番育てにくい。病氣には醫者が第一

文部省學校衛生課長北豐吉氏談として大正十四年十二月十六日東京朝日新聞に掲載
せられたものである。

一體生物は動物ならば生れて日のたゝない間、植物ならば芽の出でから日の経たない間が育てるのに一番難かしいといふ事はたれしも知るところであるが人間もその通りで生れて一歳が育てるのに骨が折れ、又三歳頃がむづかしい。それが過ぎるとやゝ樂になるが、七八歳になつてまた骨の折れる時期が来るそれを越ると余程育てやすくはなるが、十四五歳いはゆる春期發動期になると、また色々な病氣にかかりやすくなる。この時期になると他から育てるよりは、自分で自分をまもる事になるのである。あの昔から言ひ傳へる事である

が、大抵七八年を區切つて人間のからだには危険の時期が來るといふ事、即ち女の三十三歳、男の四十二歳といふのも、つまりこの年數の五周か六周かに近いとか、又は當るので、これも同じく注意を要する時期である。併し前にも言ふ通り、年頃になれば自分がそれゝ護る事が出来るけれどもこの以前においては全く親の擁護を要するので殊に三歳未滿は全く母の手に子供の注意が握られてゐる。この間の手當がよければ、決して人はその間に死ぬ事はないといつてもいい位である。それで畏れ多い事ではあるが、上つ方の御家庭を見

ると、この期間に亡くなられるやうな事がほとんどない。これによつて見ても、衛生に注意をするといふ事がいかに大切であるかゞわかるのである。よく問題になる事であるが、衛生をやかましくいふと子供が弱くなるといふ若い人はさう言はないで、發熱するとか、下痢するとか、やはり衛生の大切である事を唱へる。こゝに新舊思想の衝突があるのであるが、これは若い人の方が正しいのである。それから普通、衛生にやかましい家の子供はとかく弱くて、貧民等の子供は丈夫であるといふけれども、それは早計に言ふわけには行かない。實際において知識階級、上流社會の子供は、勞働階級、下層社會の子供等よりも弱い事實は多いけれども、それは生れながらの體質であつて、衛生と騒ぎまはるが爲に弱くなるのではないのである。それ故かういふ弱い子供を持つた上流社會の人は、ますます衛生に注意しなければならぬ

事實において下層社會の子供に死亡數が多く、人間のほとんど三分の一は五歳未滿で死ぬけれどもそのうちの大部分は下層の子供である。それで衛生をやかましくいふ事は、上下共に必要な、しなければならぬ事となるのである。世人は朝顔の苗を作りあるひは野菜の苗を作る事にいかに苦心と注意とを拂ふか。またそれがいかに難かしい事であるかを知つて居るが、人間の子供を育てるのに朝顔の苗や野菜の苗を作る程の注意と苦心が拂はれるかどうかまことに疑はしく思はれない。でもない。思へば人間を育て、ゆく事は遙に難かしい事なのである。之にはどうしたらいいかといふ事を考へたい。昔は自然に家庭において母親のする事を見習つてやり來つた時代もあるが、今學校では生理、衛生、家事といふやうなものを教へる。これらを基礎として、その任に當る人は更に自分の工夫を加へ實地に應用して行かなければならぬ

然るに學校において習つた事と家庭でする事とはほとんど没交渉になつてゆく例を見る事が少くないのである。これはまことに遺憾な事であつて、この様な事は、學校の教育者も注意し、未來の母たる學生達も注意し、また家庭においても學校で習つた事を活用するやうに指導しなければならぬものである。尙私は、この學校で習ふ課程以外に、育兒の講習會、講演會に行つて話をきくとか又はその道の人の意見をきくとか、新聞、雜誌、展覽會等において見るところを以て、母たる人の注意を養はなければならぬ。とにかく尊い一大國民の生命を預かつてゐる母なるものは何等育兒の知識なくしてこの大任に當る事はまことに寒心すべき事である、一番にすゝめ度い事であるが、第二に、これは私自身もよく經驗があるが、子供をもつて三四歳位までは絶えず熱が出たり、下痢をしたりする事がある。この時に醫者にかけるか

どうかと迷ふ事もあり、この位ならば醫者にかへずともと思ふ事があるが、之は大人を標準にするのであつて、子供は少しの場合でも生命にかへはる事が往々ある。私は三歳位までの間は少しの變化でも軽い病氣でも、直に醫者にかかる事を憲法とする様におすゝめする。無論時には早計過ぎると笑はれるかもしれないが、そんな事はかまはずに直に醫者にかけるやうにし度い。讀者の中にも思ひ當るものであらうが、もう半日早く醫者にかけたら、また、あの時療治をせずですぐ醫者にかけたら、死なずにすんだのといふ場合が澤山あらうと思ふ。子供は實に二時間三時間で取返しつかない事がある。よしんば軽い熱があつて、醫者にかへずにかへずにおいて治るものであつても、醫者にかへずにおけば二週間もかゝるのが、醫者にかけて二日で治る場合、生命はとりとめても、醫者にかへないため二週間も治らず、その子供は薄

弱になり榮養がおくれ、發育がおくれ、結局終生影響が及ぶといふ事が決して少くないのである。で、多くの人は可愛い、子供の爲だから、醫者にかける五圓や六圓の金を惜むでもなからう。そのひまを惜むのでもないであらう。結局之が等閑に付して注意を怠る結果であらうと思ふ。園丁や農夫が食物をとるひまをさへ惜んで苗を育てる事を思へば、可愛い子供の爲には五圓や六圓を惜まらず、忙しいひまを割いても、熱心に育児の任に當らなければならぬと思ふ。(談)

○子供と玩具

積木遊びを見れば

知識程度が知れる

子供に與へるおもちゃはどんなものがよいかなぞとさがすのは素人考へで、家庭にあるものは何

んでも子供のおもちやの材料になる。すべり臺のはりに張板を持出してシユーとすべる。その張板の布が張つてあらうが無からうが、おかまひなしてそこに子供の面白味がある。理窟づめにおもちやはゆかぬもので、理窟づめになると遊戯氣分がなくなる。遊戯的といふことには目的を持たぬもので、さうして氣の向くがまゝに活動するのでハッキリした目的を持つて努力すると遊戯でなく業務になる大人は毎日つらくも仕事をする、それは業務で小學校の仕事は遊戯と業務を取入れた作業の氣分のものである、そして家庭にある時代の子供には理窟づめにおもちやを與へてはならぬ。おもちやはある意味から研究の道具で子供の知識程度の發表的用具であるが、子供には慰安の意味で與へるのだ。日本の玩具の最も缺點だと思はれるのは子供の工夫を加へて發表するものつまり子供の創作力をたすけて行くものとほしい。とこ

ろが子供の工夫を加へるやうな玩具は賣れなくて人形でも何でも既製品が多く賣れる、それだけまだ母親が玩具に對する考へが發達してゐないのだ積み木にしても自由に積みにくいペンキの塗つたものが受けてゐる。色がぬつてあると積みあける形ちが制限され豫定された通り以外に面白く積まれぬから子供は早くあきが來るだから子供が工夫をして自由にどんな形ちにでも積まれるものを與へねばならぬ。まだ日本では玩具が子供の研究機關だといふ思想にとぼしい。積み木にしても男の子供は立體に積むクセがあるが、女の子供は平面にならべる天性を持つてゐる。それを女の子供に立體に積む事を教へると男の子供よりよほど立派に高く積みあげる。これ等の點を考察して子供の知識がどのくらゐ進んでゐるか、幼稚園時代にはよくわかるものだ。従つて子供が一つ積みあげるのに何十分を要するかを見るのが子供の研究問題

である。心の落ちつかぬ子供、發達しない知識の子供は、すぐあきるが、頭腦のよい子供、研究心の強い子供は積みあげるに長い時間を要するが最後まで完成する。積みあげるに長い時間を要する子供は知識の進んだ子供である。この點を觀察すればその子供が幼稚園から尋常小學へ進めるに早いかどうかを考慮するよい材料になる。これ等はおもちやの取扱ひを見て、その子供の發達状態を知るに有効な方法であると思ふ。

附記、東京日々新聞が岸邊福雄氏談として掲載せる所のものである。子供の玩具については家庭でも幼稚園でも餘程注意して研究すべきものであるがその一端を岸邊氏が述べられたもので参考とするに足ると思ふ（記者）